

II 特別連載 II

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第320回

さくらサイエンスプログラム

オンライン大学訪問く立命館大学

科学技術振興機構(JST)は、立命館大学との共催により、第16回さくらサイエンスプログラム「オンライン大学訪問く立命館大学」を開催した。本イベントは、JSTが海外の高校生・大学生にオンライン擬似訪問体験を提供し、日本の優れた大学について彼らの関心を高め、日本留学への意欲を高めてもらうことを狙いとして実施している。

イベントは9月17日、立命館大学衣笠キャンパス(京都)より、Zoomウェビナーでライブ配信された。ブータン、マレーシア、インド、カザフスタンなど31の国・地域から979名が参加し、その中にはブータンの高校で4学年の生徒が一堂に会して視聴したとのレポートも寄せられた。

今回は、カナダ出身で、同大国際入学課のFriesen RaynorさんがMCを担当。わかりやすい解説を交えながらプログラムが進行された。冒頭、ウエルカムスピーチとして立命館大学の伊坂忠夫副学長からビデオメッセージがあった。▽衣笠キャンパス(京都)、大阪いばらきキャンパス(大阪)、びわこ・くさつキャンパス(滋賀)で71カ国から2700名以上の留学生を受け入れていること▽世界各国の463の大学・機関と提携し、学生に世界各地での交流の機会を提供していること▽こうしたことで、真のグローバル教育を追求していること——がアピールされた。また、

世界各国から集まる教授陣とともに、日本のみならず世界の研究拠点としての発展を目指していることが紹介された。

最初のプログラムとなる「Introduction of Ritsumeikan University」では、MCのFriesenさんより、各キャンパスの空撮動画を交えながら、英語で実施されているコース概要、学生への支援、ドミトリー、卒業後の進路等、学生生活に関わる細かい解説のほか、アメリカン大学、オーストラリア国立大学との共同学位プログラムについて説明があった。メインプログラムとなる模擬講義は情報理工学部 Mate Kovacs 助教がびわこ・くさつキャンパスの研究室よりオンラインで講義を行った。冒頭、2014年に設置された研究室について、担当する教授陣の紹介や、研究テーマ、卒業生の進路などについて概要を紹介。その後、今回のメインテーマとなる「Machine Learning・機械学習」をテーマに模擬講義を行った。概要説明に加えて基本的な3つのタイプ「教師あり学習」「教師無し学習」「強化学習」の違いや必要なハードウェアについて、視聴者になかやりやす事例などを交えて詳しく説明がなされた。講義直後のQ&Aコーナーでは、GPUやCPUのクオリティーを求められるのかなど、かなり高度な質問も寄せられ、その場でKovacs助教より詳しく回答がなされた。

次の「Students' Panel Discussion」では、まず登壇するマレーシア、インドネシア、ベトナム3カ国からの留学生から自己紹介とともに簡単なプレゼンテーションが行われ、自身の学生生活について、来日のきっかけなども発表があった。その後、MCのリードによるパネルディスカッション形式で、さらに視聴者が興味を引くような大学での体験や授業の様子などについて、3名の留学生よりコメントがなされた。

日本学生支援機構(JASSO)の日本留学制度説明の後、Q&Aセッションが行われ、MCと3名の留学生が視聴者から投稿された質問に答えた。立命館大学で勉強するメリットなど定番の質問のほか、「日本の人たちに出身国のことを紹介した際の反応は」という質問もあり、「ボランティアで中高生に英語を教える際に、まずマレーシアについて話をする」



Q&Aセッション。左からMCのフリーゼンさん、留学生のザムさん、ルナさん、カンさん



一堂に会して視聴するブータンの高校生(学校提供)

「自分の国の名物料理を持ち込んでパーティーなどの機会に日本や他の留学生に名物料理

細田衆院議長ら出席

SSPインド同窓会 オンライン開催

科学技術振興機構(JST)とインド同窓会の共催で、9月17日に第4回インドさくらサイエンスクラブ同窓会が82名の参加者により、オンライン開催された。今回は、本同窓会が2018年10月に設立された後、4回目の同窓会合となるもので、同窓会幹事であるDr. Pragna Bhattが司会を務めた。

冒頭、インド同窓会代表としてMs. Anjara Purankの新任挨拶、JST岸輝雄さくらサイエンスプログラム(SSP)推進本部長から挨拶が行われた。続いて、細田博士衆議院議長・日印友好議員連盟会長、鈴木哲駐インド日本国特命全権大使、Sanjay Kumar Verma駐日インド国特命全権大使、D. Sakthi Kumar 東洋大学教授・JSPSインド同窓会会長からSSPと同窓会への期待を込めて激励の挨拶があった。

2022年は日印国交樹立70周年。細田氏からは、若手を中心とした人的交流は両国関係の基礎であり、日本への留学生受け入れの必要性を強調された。日印友好議員連盟会長として尽力すると述べ、同窓会への期待を寄せた。鈴木大使は「日印関係はトップ同士の強い人間関係もあり、多岐分野で交流を深めてきた。人的交流では直接会う事も重要であり、SSPはすばらしいプログラム」と述べた。また、コロナ禍で直接会う機会が減った中、人的交流の再開をこれから年度の始まる頃に咲く、さくらに例え、SSPに期待している」と締めくくった。

Sanjay Kumar Verma大使は



インド同窓会幹事のメンバー

は国交樹立70周年を祝うとともに、「日印は様々な技術分野およびインド各地で共同研究を実施しており、今後も若手を中心に更に発展すると考えている」と述べた。最後に、「インドさくらサイエンスクラブ同窓会は、両国間の架け橋となっている」と力

を作って楽しんだ」など日々の生活の一部を紹介し、2時間のプログラムを締めくくった。

強くコメントした。D. Sakthi Kumar 東洋大学教授・JSPSインド同窓会会長からは、SSPによるインドの優秀な若手が多数日本へ招へいされていることが紹介された。「インドでは各地域の大学等で日本語を勉強するプログラムが導入され、今後の日印交流が益々深まると期待される」と述べた。

● 基調講演

最初に、我妻広明九工大教授から講演が行われた。自身がSSP等を通してインドからの優秀な若手を受け入れた経験とその内容を年毎に紹介。2019年以降コロナ禍で中止されたが、23年から日印交流プログラムを再開するとコメントした。次に市川裕士東北大学准教授が登壇。自身の研究について紹介し、研究の将来的な可能性に触れ、インドの若手に共同研究の実施を呼びかけた。

インド側からは、Dr. Prashant Dhakephalkar, Director, Agharkar Research Instituteより、インドでの主要農作物である稲の稲わらと籾殻はゴミとして焼却されており、これらを微生物によりクリーンエネルギーを生産する研究の紹介があった。実用化を目指して、日本の若手研究員の受け入れをしたいと呼びかけた。最後に、Central University of Tamil Nadu Sasanka Dalapani 助教授が自身の日本留学時代の経験を様々なエピソードを交えて紹介。留学時代から現在までの研究成果についても紹介した。

● 日本に留学した同窓生からの発表

Shrivastavaさんは日本留学体験談を紹介し、日本への留学方法・インターンシッププログラム及びそれら申請書類の作成上の注意点も具体的に紹介した。

続いて、Bhattさんは、日本訪問時の経験を、旅行・社交・美食主義の観点から紹介した。最後に日本での経験が研究生活に与えた影響について、自身の研究分野になぞらえ「非常に重要であった」と締めくくった。

また、日本学生支援機構(JASSO)マレーシア事務所のRaymond Tanさんが、日本への留学について申請方法等豊富なデータをもとに有益な情報提供を行った。

最後に、これまで同窓会を引っ張って来たDr. Chugyanさんが今後の同窓会への期待と感謝の意を表し、JST伊藤宗太郎さくらサイエンスプログラム推進本部長より、同窓会の登壇者への感謝の意と、「SSCが今後も活発に活動できるように出来るだけ支援していく」と述べ会を締めくくった。